

人影のない静かな空間の中で、わずかに話し声が聞こえた。

「?・・・誰かいる・・・?」

俺は声のする方に向かった。

声のする方へ静かに近づくと、湖畔の白い砂浜の一角に二人の姿が見えた。一人はシルクで、もう一人は豊満な体つきの女性、アマンダだった。二人とも半裸の状態で絡み合っている。

「あっ💖💖そこお💖💖もつとお💖💖」

アマンダの甘い吐息が風に乗って聞こえてくる。シルクは巧みな動きでアマンダの股間を愛撫し、同時に彼女の胸に顔を埋めていた。アマンダは柔らかな黒髪を揺らしながら身をクネらせている。日差しが水滴を光らせ、二人の肌を輝かせる。

「オッパイ・・・気持ちいい💖💖あひい・・・オマンコ  
の・・・手マン・・・上手う💖💖」

アマンダの声が高くなり、シルクはさらに激しく動いた。砂の上でのけぞるような彼女の動きに合わせ

て、豊かな乳房が大きく揺れる。

次の瞬間、湖の青と空の青が溶け合うような光景の中、アマンダの身体が弓なりに反り返った。短い叫びと共に彼女は絶頂を迎え、細かい震えが全身を駆け抜けた。シルクはその様子を満足げに見つめながらも、まだ優しく指先を動かし続けている。

「お姉ちゃん、もうイッちゃったの？もっと気持ち良くしてあげるから、覚悟してよ❤️」

そう言うとしルクは自身のデカチンを握りしめた。すでにビツキビキのバキバキに勃起している。

「う・・あああ❤️おっきい❤️」

アマンダが生唾を飲み込む。

「入れるよ❤️」そう言うとしルクはデカチンをオマシンの入り口に押し当てた。

「ぬ！ぬっふう❤️」

勢いよく中に飲み込まれていくデカチンポ。

「おほお❤️ほおお❤️ほおお❤️」

アマンダはアへ顔を晒して喘いだ。

「あっ♥なか・・・トツロトロお♥」

シルクはそう言うのとゆっくりと腰を動かした。

「お！奥う♥奥にい♥当たってるう♥・・・おおお

お♥デカ・・・チン・・・ゴリゴリするう♥」

舌を出しヨガリまくるアマンダ。あまりにドエロい

表情に俺は鬱勃起をガチガチにキメていた。

「お姉ちゃん！どう？ボクのデカチンは？」

「ちゃ！ちゃ、ちやいこう♥（さ、さいこう♥）」

「ねえ、お兄ちゃんのチンポとどっちが良い？」

「うほお♥こっちい♥このチンポ！いいいん♥」

「あは♥お兄ちゃんが聞いたら落ち込んじゃうよ」

「くおお♥デカチン過ぎるう♥気持ちいところ・・・全

部う・・・責められてるう♥・・・い・・・いつ・・・あ

っ・・・イクう♥」

「ほらあ！お兄ちゃんよりボクの方が上手でしょ

う？」シルクは得意げな笑みを浮かべながら腰を激


しく打ち付けた。「パンパンパン！」と肉がぶつかり

合う音が響き渡る。

「ひぎいいいっ！すごっ・・あふううう  
 こんな激しいの初めてえ」  
 っ

アマンダの背中が弓なりに反り返り、ピンと立った乳首がヒクついている。彼女の全身が汗で光り、甘い香りが広がっていく。

「ねえ、お姉ちゃん、もうボクのモノになりなよ」

「毎晩ボクのチンポでお尻もオマンコも壊れるまで  
ハメてあげるよ」

「やあん💖 そんなあ💖 あっ！でも・あふうう💖」

彼女の言葉は途中で途切れ、代わりに甲高い喘ぎ声  
が辺りに満ちる。シルクの指が彼女のクリトリスを  
摘み上げると、「ピクンッ！」と大きく震えた。

「ん？悩んでるの？じゃあ特別サービスね❤️」

そう言うとシルクは突然動きを止め、アマンダの中に入れたまま体を離れた。「お姉ちゃんの大好きなアナルにボクの指を入れてあげるね❤️」

「ま、待って！今それしたら・・・あふうう♡！」

細い指がアマンダの肛門に侵入していく。

「グチュッグチャッ」と卑猥な水音を立てながら内壁を擦り上げると、「ブシャアッ」と大量の愛液が噴き出した。

陰から二人を除きめていた俺は勃起チンポを握り締めていた。嫉妬と屈辱で頭が割れそうなのに、股間の猛りは最高潮に達している。

「くそお★またまた寝取られちまうう★」

唇を噛み締める俺。しかし視線はアマンダの痴態から一瞬たりとも離れることができない。

「お兄ちゃんの包茎チンポじゃあボクには敵わないって♥」子供特有の無邪気な表情なのに、その眼差しには確かな勝者の余裕があった。

「でも仕方ないよね？お姉ちゃんが選んだのはボクなんだから♥」

そう言い終わらないうちに彼は再びチンポをオマンコに挿入すると激しく腰を振り始めた。

「ズボッ！ジュボッ！」という淫猥な音と共にアマ

ンダの全身が痙攣し始める。

「イクっ！またイっちゃううううっ ！」

彼女の絶頂の叫びと同時に俺の手の中でも欲望が弾け飛んだ。

「ぶっぴゅ★どぴゅ★ぴゅる★ぴゅるる★」

イカ液が飛び散り、甘美な痺れが俺を包み込んだ。

（うごごお★出ちゃったああ★）

目の前ではかつてのパートナーと年下の少年が絡み合い続けている光景が広がっている・・・それはまさに地獄のような（寝取られマゾには天国のような）状況だった。

俺が無様に達した後も二人の営みは続いていた。

「ほらお姉ちゃん見てよ 」

シルクが後ろから抱きかかえるようにしてアマンダの秘所を広げた。

「こんなにお汁垂らしちゃって恥ずかしくないの？」

「ひぐうっ！言わないでえ 」

涙目になりながらも快感に溺れるアマンダの姿に胸が痛むはずなのに、また下半身が熱くなる。なんて情けない……。こんな惨めな気持ちなのに俺の包茎チンポはまだ硬くなるのか……。

「あ！また出てきた！」

突然シルクが嬉々として叫んだ。

「オマンコからねっとりしたのがあゝ♪」

視線の先では透明な糸を引く粘液が滴り落ちていた。その光景だけで理性が吹き飛びそうになる。

「いやああああん💖お願い見ないでえ💖」

悲鳴混じりの懇願も虚しく更なる陵辱が始まる。

今度は四つ這いになった彼女に対してシルクが立ち膝になり背後から挿入していく。

「ほらほら〜お姉ちゃん大好きでしょ？バックでガン突かれるとすぐイっちゃうんだもんね〜💖」シルクは小柄な体からは想像できない力強さで腰を打ち付ける。パチュン！パチュン！と湿った音が辺りに響き渡る。



「うああ💖もうダメえ💖気持ちいい💖ひいつ💖」  
アマンダの両腕はぷるぷると震えながら体重を支えている。頬を地面につけたまま顔を上げられないほど感じ切っていた。結合部からは泡立った愛液が溢れ出し、砂浜を濡らしている。

「恥ずかしいね〜こんな格好でイキ狂うなんて！」  
シルクの言葉にアマンダの全身が真っ赤に染まった。しかし体は正直で、「きゅううん！」と膣が収縮していく。





「あふうっ💖もつとちようだい💖お願い💖」

自らお尻を持ち上げるその姿は完全に淫欲に支配されていた。シルクは満足そうに微笑むと、

「わかった！スペシャルコースだよ！」

そう言って一旦引き抜いた巨大なチンポの角度を変え、バックの体勢で一気に最奥まで貫いた！

「ぐぎゃあああん💖💖！！！」

凄まじい衝撃にアマンダの脊髄が弓形になる。

シルクが両手で彼女の腰を固定すると容赦ないピストンが始まった。

「ドチュンドチュン！」という生々しい音と共に、

「ぎゃっ💖！あんっ💖！ふあっ💖！あうっ💖！」

断続的な嬌声が途切れることなく続く。

そしてついに・・・

「出ちやううっ💖！！！」

絶叫とともに大量の液体が秘裂から噴出した。

透明な潮が弧を描いて数メートルも飛ぶ。